

### 中級Ⅲ 至高神クリシュナ

いよいよ中級も終わり、そしてクリシュナ成長譚にちなんだ命名も最後となります。

理論篇ではヒンドゥー教の世界観と規範を示した教典である『マヌ法典』の概要と、  
中世インドに興隆しカタックにも決定的な影響を与えた思想運動バクティについて学びます。

実践篇のヌリッタ篇ではトウクラ、パラン、チャクラダール・トウクラ、チャクラダール・パランを複数学びます。

いくつかリズム把握がむづかしいものが出てきますので、がんばりましょう。

そして最後にフルの曲として（ヌリッタ・ヌリティヤ両方の要素をもつ）、ヴァラナタ・チャビという曲で踊ります。

バジアンというジャンルの曲です。こちらもビルジュ・マハラジの作曲と振付で、主題はクリシュナ。

神話篇ではヒンドゥー教最大の聖典である「バガヴァッドギーター」の概要を説明し、いくつか有名な文句を覚えます。

### 『マヌ法典』とその世界観

「中級Ⅰ」において、アーリア人がもってきたバラモン教と、もといたひとたちの土着の信仰が融合してヒンドゥー教が誕生したと述べました。

アーリア人が入ってきたのは紀元前1500年頃です。そこから1500年くらいかけてゆっくりとヒンドゥー教の信仰のありかたや制度がまとまってきた。

それが集大成されたものが『マヌ法典』です。成立は紀元前200年から後200年頃と推定されています。マヌというのはひとの名前で、人類の始祖ということになっています。

『マヌ法典』はカースト制度が神によって作られたとする説を展開するものとして有名です。

渡瀬信之氏の中公新書『マヌ法典 ヒンドゥー教世界の原型』によれば、それは以下のようないくつかの論理によります。

1 このもの（宇宙）は、かつて暗黒からなっていた。それは認識されず、特徴なく、推測を超え、識別されず、いたるところ眠っているかのようであった。（一・五）  
これが冒頭の言葉です。世界は暗黒であったと。

2 間の中に存在していた永遠の存在スヴァヤンブーがあらわれ、自分の身体から世界を創造することを欲した。  
彼はまづ水を創造し、その中に種子を落とした。種子は黄金の卵となった。そこからいっさいの世界の祖父であるブラフマンが誕生した。

3 ブラフマンは卵を二分してそれぞれの殻で天と地を造った。それから名称や行為や機能や形といった概念をつくった。  
それから次々と神々や祭祀、時間、言葉、欲望、善悪、幸不幸などをつくった。

4 そして最後に世界の繁栄を願い、この使命を担うためのバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラを自らの身体から生み出した。  
バラモンは口から、クシャトリヤは腕から、ヴァイシャは腿から、シュードラは足から。

( . . . ) バラモンはヴェーダの教授と祭式の司祭を社会的機能とし、クシャトリヤはその世俗の権力によって人民を守護すること、  
ヴァイシャは牧畜、農耕、商業等の経済活動を、最下層のシュードラは上位三ヴァルナに隸属し、かれらに奉仕することを社会機能とした。  
そしてヴェーダの学習、祭式を行うこと、贈物をすることの三つが、シュードラを除くすべてのヴァルナに共通の最も基本的なダルマとされた。  
すなわち、四ヴァルナは、創造主自らによってそれぞれに配分された機能と行動様式を遂行することによって、  
世界を守護し繁栄に導くという使命を果たすものとされたのである。 1 3 頁

階層秩序を世界創造にまで遡って根拠づける戦略が成功し、憲法によって公的には禁止されたカースト制度が実質的にはいまでも残っていることも「中級 I 」に見た通りです。  
そしてこうした強化な序列社会に対する思想的な抵抗運動が常に存在したことも述べました。舞踊理論の紀元である『ナーティヤ・シャーストラ』にはその思想が入っています。  
そして、カタックにおいてことに重要なのが「バクティ」運動です。

### バクティについて

バクティは中世インドに隆盛した宗教運動です。ポイントとしては

①バラモン秩序に対する抵抗運動であること。クリシュナ信仰と結びつき、その詩や物語がカタックに取り入れられたことです。  
『南アジアを知る事典』に要領のいい記述がありますので、引用します。

インドの宗教、とくにヒンドゥー教における重要概念。これは、最高の人格神に、肉親に対するような愛の情感を込めながらも絶対的に帰依することであり、  
ふつう〈信愛〉と訳されている。ヴェーダの祭式は、王侯や司祭階級バラモンたちの独占するところであり、またウパニシャッドに説かれる自己と宇宙に関する深遠な洞察は、  
知的エリートのみに可能であった。バクティの概念を全面に打ち出したのは『バガヴァッドギーター』が最初であるが、ここにようやく、ヴェーダ以来の正統的宗教が  
一般民衆に開かれたものになり、ヒンドゥー教が急速に発展する基盤が形成されたのである。

さて『ギーター』に始まるバクティは7世紀頃から南インドで大衆の支持を得始めたのだそうです。それがやがて北インドにもひろがりクリシュナ崇拜と結びつきました。  
『ヒンドゥー教の事典』から引用します。

牛飼い人としてのクリシュナ神を中心とするバクティの伝統は、北インドで展開し、サンスクリット語のバクティの詩文学で洗練され、またそれ以上に  
民衆的なバクティ運動の中で発展した。この運動は、特にヴリンダーバンとベンガル地方で盛んであった。 1 2 3 頁

クリシュナ・バクティを発展させるのに最も貢献した人物は、クリシュナチャイタニヤあるいは単にチャイタニヤ（一四八六～一五三三）であり、  
クリシュナとラーダーの一個の肉体における化身と見なされている。彼の伝統は今日まで続いており、西欧ではハレー・クリシュナ運動となつて現れた。  
( . . . ) この派の中心課題は、ラーダーとクリシュナの愛情であり、それはきわめて官能的な愛情ではあるが、超越的で現世的ではない愛情であるとされている。 1 2 5 - 1 2 6 頁

ここにおいて、理論と実践を含めて、これまで学習してきた様々な内容が繋がったと思います。  
カタックにはクリシュナを讃えるものや、ラーダーのクリシュナへの愛を表現した演目がたくさん出てきます。それはこうした平等思想とバクティ運動が背景にあるのです。  
そしてクリシュナはインドでいちばん人気のある神で、「ギーター」は最大の聖典ですから、これはインド思想のど真ん中本流と言ってよいものです。

このあたりについては弊ホームページの「完全解説 カタック公演」及び「可愛いクリシュナ」をご覧いただければと思います。

### チャクラダール・パラン/Chakradar Paran/चक्रदार परन

ヌータン先生の師、シャマ・タイの作品です。リズムも振付も素晴らしい、傑作だと思います。ぜひ覚えましょう。

マッディヤ・ラヤです。

Dhet Dhet Dha- Drak Dhet Dha-

Gege Tita Kat Tita Gadigana

Dha- Tha- na Tha- Tha Tha- na Tha- Tha- na Tha-

× 3

### チャクラダール・トウクラ/Chakradar Tukra/चक्रदार टुकड़ा

これもマッディヤ・ラヤです。

1

Tat Tat Thai Tigdha Tat Thai

Tat Tat Tigdha Tat Tigdha Diggig Thai

Tigdha Tat Thai ta Thai Ta Thai

2

Tat Tat Thai Tigdha Tat Thai

Taa Thai Tigdha Tat

Tigdha Diggig Thai ya Tigdha Diggig Thai ya Tigdha Diggig Thai

### パラン/Paran/परन

Dhet Taa Dhet Taa

Ki<sup>ऽ</sup> Dhet Taa Ki<sup>ऽ</sup> Dhet Taa Ki<sup>ऽ</sup> Dhet Taa

Taganna Dhet Taa

Dhet Dhet Taa Dhet Dhet Taa Dhet Dhet Taa

Titi ka<sup>ऽ</sup> Gadi Gana

Dhaa na Dhaa na Dhaa na Dhaa na Dhaa

× 2

チャクラダール・トゥ克拉／Chakradar Tukra／चक्रदार टुकड़ा							
<b>1</b>		<b>2</b>					
Thai Taa	Thai Taa	Tig dha dig dig Thai		Tat Tat Thai	ss	Taa Thai	
Thai Taa	Thai Taa	Tig dha dig dig Thai		Tat Tat Thai	ss	Taa Thai	
Tat Tat	ss	Tat Tat ss Tat Tat		Tat Tat Thai	s	Taa Thai yi	
Tig dha dig dig				Taa Thai yi			
Tig dha dig dig				Taa Thai yi			
Tig dha dig dig Thai				Taa Thai 1 2			
Ta Thai ss	Ta Thai ss	Ta Thai					

Varanat Chabi	Bhajan in Dadra	Discription of Bhagwan Krishna					
これは「ダードラ」というタールで歌われる「ヴァラナタ・チャビ」という曲で、「バジヤン」という歌曲の種類に属します。							
バジヤン (Bhajan／भजन) とは、インドの伝統的な神への讃歌・信仰歌のことです。							
ダードラ・タールは「中級Ⅱ」のサラスティー・ヴァンダナすでに登場済です。							
ヴァラナタ・チャビ (Varnat Chabi) というタイトルは曲中で何度も繰り返される ヴァラナタ・チャビ・シャマ・スンダラ (Varnat Chhavi Shyam Sundar) から取られています。							
なお、何度も繰り返されるメインの詩節のことを「ムクラ (Mkura)」。							
Varnat は「描写する」、Chhavi は「姿、容姿」、Shyam は「青い、黒い=クリシュナ」、Sundar は「美しい」。							
全体で「青黒い肌の美しいクリシュナ神の姿を描写する」という意味になります。つまりクリシュナに捧げる讃歌。宗教的にいえばバクティ思想の表現です。							
Dha dhi na	Dha tu na	Dha dhi na	Dha tu na × 4				
12345	12345	12345	121212				
Varnat Chhavi Shyam Sundar ×3				美しいクリシュナ、あなたを讃えます。			
aeso moo haka rasaala				甘美で魅惑的なあなたを			
aeso moo haka rasaala							
Varnat Chhavi Shyam Sundar ×2							
Dha dhi na	Dha tu na						
rasata anga beeta basana ×2				輝く黄色い衣（ドーティ）をまとったひと			



## 『バガヴァッド・ギーター』について

インドの二大叙事詩に『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』があります。ともにヒンドゥー教の文学であり、聖典でもあります。

一本筋の通ったおはなしとして面白いのは『ラーマーヤナ』のほうで、ラーマという王子が誘拐されたお姫様を助けるためにお猿の従者と冒険に出るはなしです。

ちなみにラーマもヴィシュヌの化身です。

『マハーバーラタ』はバラタ族の戦争のはなしですが、厖大かつ雑然としていて通読には適さず、部分部分が切り取って読まれます。

第6巻の23～40章にあたるのが『バガヴァッドギーター』です。

『バガヴァッドギーター』は「尊き神の歌」という意味で、尊き神（バガヴァッド）とはクリシュナのことです。

ヒンドゥー教最大の聖典とされ、ガンディーが愛読したことでも有名です。『論語』、『聖書』、『コーラン』などと比べて分量が少ないのですぐに読めてしまうありがたい聖典です。

アルジュナは戦士、クリシュナはアルジュナが乗る馬車の御者です。

アルジュナは戦場にあり、敵の中には親族がいる。血のつながったものを殺さねばならないことにアルジュナは怖気づく。『ギーター』はそこから始まります。

私の四肢は沈みこみ、口は干涸び、私の身体は震え、総毛脱つ。（一・二九）

私はまた不吉な兆を見る。そしてクリシュナよ、戦いにおいて親族を殺せば、よい結果にはなるまい。（第一・三一）



『ギーター』は戦闘の直前に座り込んでしまったアルジュナに対して、クリシュナが「立ち上がり」て鼓舞するはなしです。

その鼓舞する説法に、のちに最大の聖典と呼ばれことになるようなヒンドゥー教の思想が凝縮されているのです。

戦士を鼓舞するといつてもむろん親族を殺すことや戦争を賛美するのではありません。戦争は人間が生まれ落ちた、どうにも動かせない、所与の状況の象徴です。			
そして戦いは人間が生きること、行為全般の象徴です。生きている以上、行為（カルマ）から逃れられない。			
そこでクリシュナは結果に執着するなど說きます。			
成功と失敗、幸福と不幸を平等同一のものとして見、自分の定められた行為に専心せよ。平等の境地に達すれば苦しみから離れ、輪廻転生から解放される。すなわち解脱できると。			
ここではいくつか有名な文句を引用しておきます。出典は上村勝彦訳の岩波文庫です。			
苦楽、得失、勝敗を平等（同一）のものと見て、戦いに専心せよ。そうすれば罪悪を得ることはない。 (二・三八)			
あなたの職務は行為そのものにある。決してその結果にはない。行為の結果を動機としてはいけない。また無為に執着してはならぬ。 (二・四七)			
自己の義務（ダルマ）の遂行は、不完全でも、よく遂行された他者の義務に勝る。自己の義務に死ぬことは幸せである。他者の義務を行うことは危険である。 (三・三五)			
たまたま得たものに満足し、相対的なものを越え、妬み（不満）を離れ、成功と不成功を平等（同一）に見る人は、行為をしても束縛されない。 (四・二二)			